

た。

太平洋戦争が、敗戦の色濃く、本土決戦体制を固めざるを得なかった昭和十九年には、陸軍病院の衛生兵は、特殊勤務者を除いて全員が第一戦部隊要員となっており、体験記執筆者も、この例に漏れず比島戦線に出動している。

このように陸軍衛生兵の不足を行うため、陸軍病院では、陸軍衛生兵に代わって陸軍看護婦を軍隊独自で教育するために陸軍看護婦生徒の教育も開始している。

体験記筆者の第二回の軍隊生活であった比島戦線が終わり、バタンガス米軍収容所における抑留者慰安の演劇活動「笑南劇場」を筆者が中心となっていて行っているが、この体験者の演劇を得意とした、その片鱗が、今回の東京第一陸軍病院における入隊兵、退役者が出る度に行われた歓送迎会に、呼び出される人気者であったこととして記されている。

第一震洋特別攻撃隊

小笠原諸島・

父島での任務

福島県 菊地 貞吉

私は大正十五（一九二六）年九月、現在の喜多方市に生まれ、昭和十六（一九四一）年四月、横須賀海軍工廠に見習工として就職しました。同十八年三月卒業、同時に旧制中学校を卒業しました。この間に横須賀軍港に入港する軍艦、戦艦、航空母艦、巡洋、駆逐、潜水艦、機雷艇、掃海艇などあらゆる艦船が入港しますので見学もしました。乗っても見ました。それで私も海軍に憧れ、昭和十七年九月に海軍に志願し、同十八年五月、横須賀第一海兵団に入団しました。

五日後に久里浜海軍工作学校に、第十六期生、普通科練習生として入校しました。ここで八カ月

間の教育を受けましたが、工作学校には木工科、金工科などがあり、私は木工科に配属され、主に舟艇、ボート、上陸用内火艇の製作でした。

また、東京湾で潜水作業の訓練も受け、船の修理、水中溶接、軍艦の見取図などあらゆる作業もしました。最後には水深一〇〇メートルまで潜りました。

同十九年一月、練習生を卒業と同時に実施部隊に配属され、横須賀田浦に停泊中の輸送船に乗りました。行き先は極秘でしたが、うすうす硫黄島に物資を輸送するようであると知りました。

駆逐艦に護られて早朝出航しました。次の日の夕方、八丈島沖で敵潜水艦の魚雷攻撃を受け船は沈没しました。アッと言う間でした。船が沈めば浮流物が浮きますので、それに掴まって救助を待っていました。お互に元気を付けて軍歌などを歌っておりましたが、その内一人また一人と泳ぎ疲れて沈んでいきます。幸い私は駆逐艦に救助されて横須賀海兵団に戻りました。

数日後、豊橋海軍航空隊に配属となり、豊橋基地にて勤務をしておりました。同年七月、再び横須賀海軍水雷学校に転勤になりました。ここでは海軍第一震洋隊特別攻撃隊、父島方面特別根拠地隊、大蝶部隊が編制されておりました。総勢一八〇人で、北は樺太、南は沖繩まで、各県よりの集まりの部隊です。お互いに言葉が良く分かりませんでしたので苦勞致しました。

第一震洋隊とはどんな攻撃隊か知りませんでした。夜になると毎日のように軍港で出撃訓練です。よくよく見ればベニヤ板の小さな舟でした。

舟の長さ五メートル、幅が二メートル位で、前部に二五〇キロの爆弾を搭載して、敵艦に体当たりするとは、何とも理に合わないことだと、私は心の中でつぶやきました。それでも国のためと皆頑張っておりました。この小さな舟は四艇と名付けられておりました。

夜間出撃のために、舟のエンジンはエンジン音が静かな自動車のものを使用します。八月にな

ると訓練の回数も少なくなり、輸送船に荷の積込みがあり、いよいよ出撃が間近になったと感じました。先発隊（基地設営隊）が出撃して数日後に、私達本隊も出撃致しました。

この先発隊の輸送船は敵の潜水艦の魚雷攻撃を受け、沈没して十人の戦死者が出ました。福島県東白川郡の高宮正一氏もその一人でした。私達本隊の船も潜水艦の攻撃を受けましたが、味方の駆逐艦に護られ、翌朝無事、父島の二見港に入港しました。

休む暇もなく荷揚げ作業です。夕方に荷揚げも終わり、一息入っていた所で、敵のグラマン戦闘機の空襲を受けました。その時の照明弾の明るさ、美しさは何とも口では言い表わすことができません。今でも記憶に残っています。荷揚げをした物資は、私達の基地に夜通しで運びました。

次の日からは④艇の格納庫造りです。父島は岩山で、いたる所が絶壁です。その岩盤を鑿岩機で穴掘りです。穴は径五メートル、奥行き五〇メー

トル、船と一緒に穴で寝起きです。また米軍が上陸するような所は、陣地造りが毎日の仕事です。そして夜は出撃訓練です。

十二月、一月、二月、三月頃は夜も寒く、海水も冷たく、辛い毎日でした。また少しばかりの土地を耕して野菜を作り、また魚を獲り食糧の足しにしました。硫黄島が玉砕してからは毎日のように空襲です。父島の山の上に電波探知器がありました。性能は余り良くないので、上空を飛ぶ飛行機はその「レーダー」に機影が入りますが、海上すれすれに飛ぶグラマン戦闘機はレーダーに入りません。島の上空に来て初めてレーダーには入ります。その時はすでに遅く、機銃掃射を受け戦死者がでます。一本の立木に一列に並んで機銃掃射を避けます。その時は何とも言えません、死に物狂いです。

また艦砲射撃も受けました。その時私の近くで炸裂し、その爆風で右の耳が聞こえなくなりました。父島は岩盤ですので、その爆弾は余り効果が

なく、親子爆弾を使用してきました。それは落下途中で親から小型爆弾が飛び散り、それには先の方に羽が付いております。大きさは缶詰より少し大きい程度で、羽が離れると爆発します。地上に落下して草むらにある物に触れると爆発し、それで多勢の戦死者が出ました。

私達の水上攻撃④艇は出撃しても一度も成功はしませんでした。艦の周りに木材を流し、浮かべているために艦に近づくことができずに戻ってきませんでした。フィリピンのレイテ湾では成功したようですが、これは終戦後に知りました。

当時は必勝の信念で、士気も旺盛でありました。しかし「勝つまでは欲しがりません」「撃ちてし止まん」の夢は破れて敗戦となりました。

島の兵隊だけで戦争を続けようとして頑張っておりましたが、父島方面根拠地隊海軍中将森国造氏に止められ、天皇陛下のお言葉にあった「忍び難きを忍び、耐え難きを耐える」との気持ちで武

装解除となり、間もなく米軍が上陸して来ました。

米軍の持ってきた種々兵器、機械等にはただただ驚くばかりで、これでは日本は戦争に負けるといふ実感が湧いてきました。

昭和二十一年一月、呉海兵団にて復員となりました。帰郷の途中、列車の中より見ますと広島、神戸、大阪、名古屋、東京、大宮、いたる所が焼野原です。空襲の時の国民の逃げまどう状況を想像しながら我が家に帰りました。

この有様を見て二度と戦争はしてはならない、してはいけないと思ひ、再びこのような戦いの無いことを望んで、平和の尊さを今もって感じます。

唄に聞く 八丈島の そそり立つ

流刑の島と 歴史は伝う

征途中 魚雷にはかなく 散りしとも

みたま何処に 迷いおりしや
南下せる 輸送船にて 何想う

兵士の心 彼も人の子

父島に 観光客が おりゆきて

船内静もり 墓参団のみ

誰も無い デッキに立ちて 大声で

吾れは叫ばむ 今行くぞ

戦争を 美化する心 みじんなくも

ほど走し出る 歌は軍歌に

身を軽く 水持ち花持ち 香も又

遂に踏みせし 硫黄の砂地

天山の 慰霊碑前に額づき 言葉なく

老の涙は 止まるを知らず

熱風の 南方空の 壕の前

ドクドク飲ませる 故里の水

英魂よ 聞こしみたまえ 詠賛歌

祖国の平和 悲しい平和

甥に姪に 託され持し 酒タバコ

語りかけつつ 笹ダンゴむく

壕の上 観音像の お在します

慈愛かけませ 逝けるみたまに

ふと見れば 手製の人形 供えある

座せる姿に つのかくし白し

娶とらずに 征途に就きし 若兵に

せめての希いか 花嫁人形

銀ねむも 幾万兵の血を 吸えて

島覆い隠す ジャングルと化す

老いし吾れ 再び此の地 踏めざると

心に聞かせ 御霊に告げむ

此の戦争 誰に責ある 国民の

すべて懺悔す くり返すまじ

人と人との交流、心と心のふれ合い、美しい人間関係が生まれたならば明るく楽しくくうるおいの

或る人生があると思えます。

1 死しての千年より 生きての一日

2 昨日は人の身、今日は我が身

3 子で子に、ならぬほととぎす

4 鳩にも、三枝の礼あり

5 明日ありと、思う心の仇桜

また青春には年令が無いのです。若い人ばかりに青春があるのではなくて四、五十代、否、六〇代にも、それなりに青春があるのです。老人は物事も経験が深いために考え方もよく判断も円満です。世の宝と言えましよう。何とぞ長生きして社会のために尽くして頂き、また戦争体験談も後世に語り伝えて下さい。それにつけても食生活と適度の運動に心がけ、趣味に打ち込んで「老いるべからず熟すべし」の諺を心に、大きな財産である友達を大切に、楽しく生きて行きたいものです。

【解 説】

体験記執筆者は、特攻兵器「震洋」の隊員となり終戦を迎えているが、体験記に、その特攻の隊員となった経緯が語られている。

体験者は昭和十七年九月に海軍を志願、昭和十

八年五月、横須賀第一海兵団に入団、五日後に久里浜海軍工作学校、第十六期生・普通科練習生として木工科に配属され、舟艇、ボート（上陸用）および内火艇の製作に従事する。

一方、東京湾で潜水作業訓練と共に船の修理、水中溶接などの作業訓練を受け、最後には水深一〇〇メートルまでの潜水を達成した。

昭和十九年一月、練習生卒業と同時に実施部隊に配属され、横須賀田浦から輸送船に乗り、硫黄島への物資輸送の任務に着いた。しかし八丈島沖で敵潜の魚雷攻撃を受け船は沈没、駆逐艦に救助されて横須賀海兵団に戻る。

その後豊橋海軍航空隊に配属となり、さらに横須賀海軍水雷学校に転勤し、ここで編制された海軍第一震洋隊特別攻撃隊、父島方面特別根拠地隊、大蝶部隊に配属となった。総勢一八〇人であった。

体験記筆者は、第一震洋隊とはどんな攻撃隊か知らないままに、毎日夜に軍港で出撃訓練を受け

た。長さ五メートル、幅が二メートルのベニヤ板の舟の前面に二五〇キロ爆弾を搭載し、敵艦に体当たりするという④艇と名付けられた舟艇で、音の静かな自動車エンジン使用している。これが「震洋」であった。

八月に入って訓練の回数も少なくなり、輸送船に荷積みが始まり、先発の基地設営隊が出撃し、数日後に体験者の本隊も出撃した。この先発隊の輸送船は敵潜の魚雷攻撃で沈没、十人の戦死者が出た。本隊の船も潜水艦の攻撃を受けたが、無事、父島の二見港に入港した。

しかし体験者の任務は特攻艇「震洋」部隊である。次の日からは④艇の格納庫造りで、岩山で岩盤の絶壁が多い父島で、径五メートル、奥行き五〇メートルの穴を掘り、船を格納すると共に隊員もそこで寝起きする。そして夜は出撃訓練であった。

冬場は夜は寒く、海水も冷たく、訓練は辛い毎

日であったという。そして野菜を作り、魚を獲って食糧の足しにしている。

こんな労苦の体験が、当時の本土防衛の第一線であった。そして硫黄島が玉砕してからは毎日のように空襲があり、父島の山の電波探知器の性能が悪く、上空を飛ぶ飛行機が、そのレーダーに入る時には、すでに機銃掃射を受け、戦死者を出す始末であった。

水上攻撃④艇は出撃しても一度も成功はしなかった。終戦後に知ったことであるが、敵艦は周りに木材を流し、近づくことができずに戻ってきたという。

このように「震洋」は一人乗り水上特攻艇で、約六千隻製造され、輸送途中の海没による戦死も含めて、約二千五百人が戦死している。これに似た兵器として、陸軍にも二人乗りモーターボート「マルレイ」というがあり、海上挺進隊を編成、沖縄戦に出撃している。

また、体験記筆者は、父島への米軍機の空襲で、レーダーの性能の低さに慨嘆している。

太平洋戦争は、今にして言えば一面では科学技術の戦争であったが、代表の一つがレーダーであったと言われている。技術的には陸軍が海軍より先に行っていると言われ、特に高射砲の射撃において、方向・速度・高度を計算して射撃に伝えるレーダーは、防衛上必須の兵器であった。

このレーダーの実用化の例には、当時の住友通信工業が、シンガポールで押収したイギリスのレーダーをモデルにして「三型」を開発し、昭和十九年秋から関東地区の高射砲部隊に配備されている。

体験者の体験した父島の防衛には、时期的にもまだ配備されていなかったと思われるが、最大四〇キロ先の敵機B 29に命中できるという計算がなされていたと言われるが、実際には、その性能は別としても、高射砲自体の射程がB 29の高度に届かなかったとあれば、問題はレーダー技術以外の

ことであつたらう。

しかし見張り用としては、和歌山―姫路―岡山の線に捕捉電波のネットを設け、これに高度測定用レーダーを連動させることに成功し、松戸、越谷、御前崎に配備された高度測定用レーダーが東京に接近するB 29を捕捉して、この情報によって関東地区防衛の任にあつた第十飛行師団の戦闘機の邀撃態勢を確保できたと言われる。この高度測定用レーダーの高度誤差は五〇〇メートルで、当時としては精密な科学兵器であつた。